THE ROTARY CLUB OF YAMATO-NAKA

大和中ロータリークラブ会報

WORLD UNDERSTANDING AND PEACE THROUGH ROTARY

"ロータリーを通じて、世界理解と平和を"　1981-82　R.I　会長 スタンレーE.マッキャフリー

第184回 例会　57年 2月14日　第190号

伊藤会長テーマ　身近かな奉仕に誠を尽そう

司会　SAA　冨沢重徳

出席報告

会員数	出席数	出席率	前回の修正

欠席者　省略

本日のプログラム　クラブホーラム
国際奉仕について　有沢委員長

次週予定　I.G.Fに備えて

〈ゲスト〉　（順序不同、敬称略）

伊藤星子、郡司禎子、伊藤克枝、有沢阿津子、伊丹隆夫、北砂安子、伊藤祐二、藤田アサ、伊丹美代子、寺田久子、鈴木好美、清水　修、竹之内孝子、竹之内幸之助、辻小百合、清水紘子、竹之内マイ子、富沢久寿、山本崇人、中西多恵子、中西慶太、中西祐輔、中西佳識、古木邦明、古田土健一、土屋丈輔、土屋英輔、松本千枝子、松本善雄、松本恵美子、

〈会長報告〉　会長　伊藤　正男君

お早ようございます。本日は第2回家族会に当り多数の方々のご参加を頂き誠に有難うございました。天候も素晴しい春日よりになりどなたも大変お元気で本当に喜ばしい限りで感謝致します。又、この家族会を企画された親睦委員長さんをはじめ委員の皆様のお骨折りに厚く感謝申し上げます。ロータリーはご家族のご協力なくして発展するものではありません。皆様この広々としたサマーランドで一日をごゆっくりお過し下さい。

〈幹事報告〉　幹事　辻　国明君

本日はとくにございませんが2月18日は本日の家族会における定例会のため振替休日となりますからお間違えのないように願います。

〈委員会報告〉

親睦活動委員長　伊藤　英夫君

本日はようこそ第二回家族会にご出席頂きました。私共数名のスタッフが皆様のホスト役としてお世話させて頂きますのでごゆっくりと一日を満喫して下さい。

（情報委員会よりの寄稿）

日本とは何か　（57年2月1日）

日本より米、加、

全国26カ所にあるインドシナ難民の1時滞在施設。その一つ、埼玉県大宮市にある社会福祉法人「愛弘学園」では、ベトナム難民61人が暮らす。平屋建ての宿舎に入ると、子供たちの歓声が急に遠ざかる。四畳半の壁一面に、新聞広告のチラシを張りめぐらした部屋。レ、バン、ビンさん（34）はこたつに身をかがめていた。小さなボートで12日間漂流したあと、通りがかった貨物船に助けられた。日本に上陸して2年4カ月。サイゴンでは電気関係の仕事をしていたという。「このまま日本に住もうとは思わない。住宅は高いし、物価も高い。未来が見えない。母と兄弟のいるカナダへ行

1.真実かどうか　2.みんなに公平か　3.好意と友情を深めるか　4.みんなのためになるかどうか

事務所：大和市中央1-5-40
大和市商工会館内
☎0462-63-7926
例会場：大和市大和南1-4-4
八千代信用金庫大和支店4階
☎0462-64-3654

例会日：毎週木曜日12時30分より
会長：伊藤正男
副会長：寺田伍六
幹事：辻　国明
会報委員：古木・大高・合田・松本(三)

きたい」隣の部屋から顔をのぞかせた元軍人のグエン、テ、クオングさん（35）も云う。「米国に行きたい。だめなら日本でも…」。なぜ、という問いかけには、もどかしそうな視線を向けるばかり。一方は強く、一方は遠慮がちに日本を拒否する。だが、両方とも米、カナダの最近の受け入れ制限強化のため、希望がかなう見込みはないという。それでも繰り返す。「なにがなんでもカナダ」「最終的には米国へ」―。彼らのように、日本上陸後も第三国への再出国を目指す一時滞在難民は千八百二人（一月十五日現在）、日本定住を決めた千七百六人を上回る。うち四分の三は、二人と同様に再出国の見込みがないまま待ち続ける。

定住を決めた難民の中にも、将来のことになると「わからない」と無表情になる人が多い。

条件は緩めたが

今月一月一日。難民条約の日本での発効とともに、新たな出入国管理令、難民認定法などがスタートした。昨年四月以来、定住ワクは三千人。国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）に対して、年間難民救済経費の約半分の六千万ドル（約百三十億円）を支出する資金援助と合わせ、「これでわが国の難民受け入れ態勢は整った。むしろ他国にもひけはとらない」（法務省）。「扉は開いた」と、胸を張る政府。しかし新法スタート後一カ月たっても、難民認定の申請は約十件。扉の手前で用心深く立ち止まった多くのビンさん、クオングさんは動かない。一九七五年のサイゴン陥落以来、インドシナ三国から流出した難民の数は約九十四万人（昨年十一月現在）。今も毎月一万人前後がボートに乗って漂い出す。それなのに過去五十数万人を受け入れている米国、約八万人のカナダが相次いで受け入れを制限している。かつて"海上の道"にのこって椰子（やし）の実が流れついたように、日本への漂着難民はさらに増えることが予想される。インドシナ難民が問題になり始めたとき、日本の対応は遅れ、国際的な批判を浴びた。しかし今は違う。米、カナダ、英など大半の受け入れ国は、国内に難民の親族（二親等以内）がいることを条件とする。これに対し、日本は親族がいなくても、通常の生活を営むことの出来る難民は原則として許可される。「無条件に近い。一番開かれた国」（総理府）。また、定住促進センター（兵庫、神奈川）での語学研修期間（週三十三時間、十三週）も、日本語の難しさを割り引かねばならないが、カナダ、西独などに次いで長いほうだ。それなのになぜ日本に定住しようとしないのか、という疑問。

共存の姿勢なし

ロンドンの南西90キロ。緑に囲まれた静かなたたずまいの中に、民間ボランティアの難民収容語学センターがある。日本の一時滞在施設に十カ月いたというベトナム人、ジャップ、ナン、ハイさん（33）。しばらく空を見つめてから話し出した。「自由。未来。これを求めて我々は国を捨てた。我々の国では失われてしまったから。だが、日本にもなかった。あるのはあなたがた日本人の自由と、日本人の未来だけ。外国人の我々を仲間入りさせてくれない。違うかい」開かれたはずの難民政策。実は日本のための、日本の国際社会向けの政策であって、たどり着く難民に対して開かれたものではなかったようだ。同じ村の中は家族のようだが、他の村となると"ヨソ者"と峻（しゅん）別するムラ意識の伝統。それが国の規模では「われら日本人、かれら外人」。しかも日本だけでほぼ完結した効率経済のモデル社会をつくり上げたことによって、異分子はますます入りにくくなっている。異質性を排除した同質性社会として日本は発展してきた。その外国人政策も排除か同化かのどちらかで、異民族を認めた上での共存の姿勢はない。世界は動く。スウェーデンをはじめ欧米社会では移民、難民、季節労働者が絶え間なく国境を移動している。その数は欧州だけで1,200万人と言われる。好むと好まざるにかかわらず多民族化が世界の流れ。同質性に固執する日本は際立った畸形の国として映る（ヤンソン由美子氏）